

日野の歴史と民俗 145 (詳細版)

日野の水車

多摩川と浅川に挟まれた日野は、中世末から用水の整備を行い、東京の穀倉地帯といわれる程に水田が広がっていました。

網の目のようにめぐらされた用水には、江戸時代後期から水車が掛けられ、米や麦の精穀を行っていました。同じ頃編纂された地誌『新編武蔵風土記稿』には、落川に水車が2基あったと書かれており、上田や南平には文化11年(1814)以前から、西平山(大和田村)には弘化5年(1848)頃から水車があり、営業していました。特に南平では、酒造用に米を搗いていたようです。

個人の経営による水車を**個人水車**、数人が集まって共同出資して経営する水車を、**共同水車**と称しています。

どちらの場合も水車を設置する際は、用水沿いの上・下の村の承認が必要でした。

水車は米を搗く杵の音やゴーゴーと大きな水音がするため、人家から離れて設置されていました。子どもたちは親の目を盗んで冬季に止まった水車の水輪の中に入り込み、二十日鼠のように輪を回し、水輪から垂れた水でできた氷柱(つらら)をあめんぼうといってなめて遊びました。

個人水車

水車の活用が始まると、それまでの人力で精穀する地唐臼(じがらうす・地元では「じんがらうす」と称している)などがすたれていきます。

しかし水車機械は高価なため、主として富裕な村役人層が水車を経営し、近隣の賃搗きなどを行い、米を買い付けて精米して販売しました。これを個人水車と呼び、規模が大きく、建物は25坪(82.6㎡)ほどで、廻し堀を作って用水を取り入れ、屋内に引き込みました。水輪は直径1丈2尺~1丈6尺(3.63m~4.84m)程で屋内に設置され、搗臼(つきうす)が14~30基、挽臼(ひきうす、製粉用)が1~2基設置されていて、江戸時代には運上金が、明治になると税金がかかりました。

隣町の八王子では明治以降絹織物産業の急成長による人口増加で米の需要が増えたので、個人水車では米を近隣から買い付けて精米し、八王子へ売りに行きました。八王子に近い西平山には特に水車が密集して、八王子へ米を運搬する馬車が行き交ったので、米つき街道・馬力街道と称されました。なかでも、金田水車では1丈2尺の水輪が屋内で回り、日野では最も多い30基の臼で米を搗いていました。

地域の個人水車は昭和になると3軒が電化して米穀店となり、今も滝瀬商店と山本米穀店の2軒が続いています。その他の個人水車は次第に廃業していきました。また、大正頃には水車を動力とした生糸の撚糸や揚返(撚った糸を機械にかけるための規格に巻きなおす)工場も市域に4ヶ所(西平山・平山・高幡・東光寺)ありました。

共同水車

村人が共同出資して、6坪(19.8㎡)程度の小屋に搗臼が4~6個程度の共同水車(寄合水車・もやいぐるま)を作り、順番に使用することが明治以降に流行し、ほとんどの村で共同水車が作られました。これは株(必要に応じて、1株、1/2株、1/3株、1/4株の種類があった)を所有している人が順番に当番を決めて利用するものでした。小屋は2間×3間の6坪くらいで、個人水車と比較すると小さく、水輪は屋外にありました。



(程久保協同水車 しょういこで米などを運ぶ女性)

当番の日は朝から翌日の朝まで搗き臼を使えます。水量が少ない時はなかなか精穀できず、盗難を恐れて小屋に布団を持ち込んで泊まったとか、屋内には電気がないので暗くなると家人が提灯を持って迎えに行ったとか、いろいろな話が伝えられています。

ところが第二次大戦中に米が配給制になったため、大部分の共同水車は使用されなくなり、そのまま放置され、戦後は所要時間の短い電動精米機に代わっていきました。

共同水車はほとんどが戦後しばらくしてなくなりましたが、日野万願寺では昭和初年に水車場を廃止して共同の精米所を作り、平成4年まで使用していました。

現在日野市内には2基の復元水車があります。平成8年(1996)に新井の向島用水に、同15年(2003)には栄町3丁目水車堀公園に作られ、「水車のある風景」として親しまれてきましたが、今年になって向島用水の水車を活用しようと水車を使って米を搗く実験を始めたグループが、今後、学校教育などにも利用できればと活動しています。

いま全国的にクリーンなエネルギーとしての水車に注目が集まり始めています。

(日野市郷土資料館運営協議会委員 上野さだ子)

*** 郷土資料館企画展「日野の水車」開催中**

10月28日まで

午前9時～午後5時(月曜休館 月曜が祝日の場合は翌日休館)

場所 日野市郷土資料館展示室

無料